保育の現場から

生活発表会のある場面から思いめぐらして

角　真理子

年長児コウ君の姿から

子どもの園生活がそれぞれに充実してくる十二月ごろに、生活発表会を催す園も多いことでしょう。私の園でも、子ども自身の表現という視点を中心に据えた発表会にしたいと、毎年取り組んでいます。

昨年の発表会のエピソードです。ある年長クラスでは、子どもたちみんなで創作した劇をすることになりました。「空からポップコーンが降ってきたらどうなる?」とヒロくんが言い始めたことから話がつづられていきました。

「食べたいな、食べたらお腹が膨らんで、空を自由に飛んでいける」「空を飛べたらうれしくてうれしくて、子どもたちがお腹をぶつけ合って遊んでいたんよ」「そしたら落下してしまって、そこはザリガニが住んでいる噴水の中やったんよ」

「子どもたちはザリガニのハサミに挟まれて、ま

た空に飛び上がってしまったんよ」「空にはお城があって、ツバメが住んでてね」「ツバメから宝箱を三個もらって、それを開けると……」というところまで話が進みました。

宝箱から何が出てくるといいか、みんなで考えていたときに、コウ君が、「ウンチが出てきたらいい」といたずらっぽく提案。すると、みんなは一斉に「おもしろい！」とその意外性のある発想に喜ぶとすかさずコウ君は「いい匂いがするウンチがいい」とまたもや概念を覆す考えを出してみんなは大いに盛り上がりました。自分の考えが仲間に喜んで受け入れられたことに気をよくしたコウ君は、いつにもなくすんなりと劇ごっこに加わりました。それぞれにツバメやおばけ、魔人や人間の子どもなど、自分の好みの役になって演じ始めると、コウくんはなぜか友達が考えついたザリガニの役にこだわって演じていました。

何日かして本格的な役決め段階になると、コウ君は、今度は自分が提案した場面の、ある子どもの役を取って演じていました。宝箱を受け取ったり、アリにアメを渡す場面は演じていましたが、直接にやりとりがない場面、たとえばツバメがクイズを出したり、魔人が魔法をかけたりする場面になると、劇から抜けてその周辺を歩き回っています。話が進み、コウ君が宝物を見つける場面までくると、友達はコウ君の好きな色の宝物を譲るなどして、劇の中に入るように誘う姿が見られました。

挿入的な話題ですが、生活発表会の三日前のこと、コウ君はアッ君、タイ君と一緒に爆弾に見立てたブロックを、ほかの友達に向けて投げて歩いていたのです。そしてその後今度はヒロ君を誘い、縄跳びを始めました。大声で数を数えながら、繰り返し繰り返し跳んでいました。コウ君は縄跳びが苦手だったのです。自分を奮い立たせているよ

うなコウ君を、私は頼もしく感じて見ていました。

いよいよ発表会の当日、プログラムが進んでコウ君たちの劇が始まりました。半ばまで進み、子どもがおばけに魔法をかけるとき、コウ君は魔法の杖を放り投げて、舞台の真ん中に座り込んでしまいました。するとナッちゃんがすぐさま放られた杖を拾い、二本持ったまま劇を続けました。座り込んでしまったコウ君に対して、ほかの子どもたちも戸惑いつつも誰もとがめることもなく、むしろカバーするかのような動きで自分たちの創った劇を演じきったのです。最後の方でコウ君が立ち上がって劇に復帰すると、ナッちゃんはさり気なくその杖を返していました。

コウ君はなぜ座り込んだのか、劇の運びに納得がいかなかったのか。仲間や保育者、そして大勢の観客の期待に対する強い緊張感に耐えかねたのか、担任にはわかりませんでした。園生活最後の発表会での劇をやりきってほしいと願いながら、コウ君が自分で動きだすのを見守り続けたのです。

コウ君のあゆみとこだわり

コウ君は年少組に入園したころから、独自の内的世界を深く探求することにこだわってきました。

たとえば自分の膝を指でさして、この中に何が入っているかと担任に尋ねたり、電気のスイッチと蛍光灯の位置が離れていることから、その構造に関心を抱く、あるいはアオムシを潰して中身を見ようとしたりと、見えない物の内部に対する強い興味でさまざまな探索行動がありました。

また、平面状態になっていた段ボール箱にセロハンテープを貼ることで、立体化できたことから、セロハンテープは貼った対象物にパワーを与えるのではないかと仮説を抱いて、自分や担任の指先や足の裏に貼ってみたり、ハサミに巻いたりもし

ました。

そして、年長になると光や風、火や水が起こす現象に関心をもち、意図的に新たな現象を創りだそうとしていました。

こんなふうに自分独自の世界で豊かに探索をしながらも、あるときには友達とのかかわりが課題になっていると思われる行為も見られました。それは〈異質のものとの出会い〉をテーマにした遊びです。具体的には、自分のロッカーにピッタリの箱を貼る、自分のスモックのポケットにちょうど合うラップの芯をはめる、プラスチックの容器の口にキッチリ合う粘土の蓋を作るなど、さまざまな物を用いて、自分とは考え方が異なる人との出会いのシミュレーションと思われる遊びを繰り返したのです。

コウ君は、自分の内的世界の探求だけでなく、外的世界へも適応しようとし始めていたと思われます。

大人の目と子どもの共感性

発表会の場面について、大人はつい「みんなと共に劇をしなかった」「できなかった」としてとらえがちです。けれども、子どもたちにとってはどんな意味をもったのかを考え直してみたいと思います。

コウ君たちは、共に物語をつむぎ合い、みんな

が創作に加わりました。ほかの子が発案した役も互いに演じ合いました。コウ君が好きな色の宝物を譲られたように、共に相手の好みやこだわりを尊重し合いました。葛藤や妥協も体験しつつ、共に一つの劇の世界を創りだす力を育て合ってきたのでしょう。

当日、ハレの舞台の上で、劇の途中にコウ君が魔法の杖を放り出して座ったときの心情についても、子どもたちは劇を続けながら、互いに共振的な理解に精一杯努めたのだと、今になれば推察できます。だからこそナッちゃんはコウ君の放り出した杖をすぐ拾っても、コウ君に渡して劇に戻らせようとはしなかったし、ほかの子どもたちも、コウ君の体に手をかけて立ち上がらせようともしなかったのでしょう。

コウ君は何らかの葛藤を抱きつつも、みんなと共に、劇の真ん中に居ようとし、みんなもまた、コウ君のその思いを共感していたことに気づかされ、ハッとしました。

実はこの原稿を書き始めるときには、コウ君の葛藤を主軸に考えようとしていました。けれども書いているうちに、劇の最中に、「座り込んでしまった」ということにこだわっていた私は、大人の価値観や概念の枠から出ていない。それに比べてコウ君やコウ君の周囲の子どもたちは、共に自分の世界の枠を外して、共に感じ合って過ごしていることに気づかされて、そのことに感動を覚えました。

宝箱から何が出てくることにしようかという相談をしているときに、コウ君の、「ウンチ」という奇想天外な発言を肯定的に受け入れたことも、みんなで一緒に劇をやりたいという思いが子どもたちそれぞれの中にあったからではないかと思われます。

コウ君は発表会後、初めて登園してきた日に、また少し奇妙な行為を見せました。それは、宝箱の中に入っていた物を全部外に取り出して、何と自分が箱の中に身を沈めて、蓋をピッタリ閉じたまましばらくそのままでいたのです。宝箱の中で何を思い返していたのでしょうか。幾つもの思いが絡まっていたと推察されますが、劇遊びの過程や当日の仲間との共振・共感の喜びも含まれていたでしょう。

このことは、コウ君にとってかけがえのない深い体験として児童期、青年期と、その後のコウ君を形成していく土台になるような気がします。

幼児期の子どもは、私たち大人には理解し難い行為をすることがあります。自分に無意識に働く常識の枠から意識的に出て、子どもに寄り添い、子どもが見ているものを見ようとし、感じていることを感じ取りながら共に居ることを心がけたいと思いました。

そのためには、常に保育者間で話し合いをして多様な見方や意味を考える習慣を身に付けて、幼児期の子どもたちが抱えている本質的な課題を読み解いていきたいと考えています。大人がわかりにくい行為をしているときは、その子にとって、かけがえのない大切な育ちをしているときかもしれないと、とらえ始めています。

「たいせつなことはね、目に見えないんだよ」という『星の王子さま』（サン＝テグジュペリ／作　内藤濯／訳　岩波書店）のせりふが思い出されます。コウ君が発表会で見せたような、子どもたちの姿の中に、「目には見えない大切なもの」を読み解きながら、子どもの傍らに居続けたいと思っています。

（和歌山市　さくら幼稚園）